慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	雑誌 ドイツ刑法 (1934-1944年)
Sub Title	Deutsches Strafrecht : Strafrecht, Strafrechtspolitik, Strafprozeß
Author	宮澤, 浩一(Miyazawa, Koichi) 外山, 美砂子(Toyama, Misako)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	2003
Jtitle	法學研究 : 法律・ 政治・ 社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.76, No.11 (2003. 11) ,p.108- 142
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	資料
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-20031128-0108

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

法学研究 76 巻 11 号（2003：11）

資料

雑誌　ドイツ刑法（1934-1944年）

宮澤浩一・外山美砂子

解　題

1 「ゴルトダンマー刑法雑誌」は、1853年に、当時、ベルリン高等裁判所（Königliches Obertribunal）の裁判官であったテオドール・ゴルトダンマー[1]により創刊されたので、2003年1月に、誌齢150年を数える。2002年に、1974年以来、編集主任を務めてきたパウル=ギュンター・ペッツ（Paul-Günter Pötz[2]）と共に共同編集者となったW. キューパー（Wilfried Küper）とJ. ヴォルター（Jürgen Wolter）は、連名で、「150年経ったゴルトダンマー刑法雑誌（Goltdammer's Archiv für Strafrecht nach 150 Jahren）」と題する論文で、この雑誌の150歳誕生を祝った[3]。後にも述べるように、この雑誌の第1巻（1853年）から第77巻（1933年）までの全論文は資料化されている[4]。その資料の解題の中で、この雑誌の戦前の歴史について簡単に紹介しているが、今回のキューパーとヴォルターの論文によって、さらに詳しい歴史的展開が明らかとなった。参考までに記すと、その論文は、Ⅰゴルトダンマー刑法雑誌の時代区分、編者、目的、刑法の動向、Ⅱ評価、Ⅲ R. v. デッカー出版社（R. v. Decker's Verlag）、に分説されている。主要な部分はⅠにおかれ、1. 1853-1899（判例の収容場所。法の統一と改正）、a）Theodor Goltdammer（GA 1853 - 1871）、b）Carl Hahn（GA 1871 - 1879）、c）Mehrere Criminalisten（GA 1880-1886） und Meves/Dalke/Mugdan（GA 1887-1899）、2. 1900-1933/1944（Kohler/Klee）、a）Josef Kohler（GA 1900-1919）、b）Karl Klee（GA 1919-1933/44）、c）GA 1934-1944、3. 1953-2001（Grützner/Pötz）、4. Ab 2002 の4部に分けて説明がなされている。

2 「雑誌　ドイツ刑法」は、上記の論文では2のc）GA 1934-1944としてごく簡単に触れられているにすぎない（わずか12行である）。第2次大戦中に生まれた2人の若い編者にとっては「ナチス支配時代」の「鬼子」とも言うべき存在である

と考えているのであろう。

1934年に、当時プロイセン司法省の次官であり、ライヒ議会の議員でもあったローランド・フライスラー[5]が編集主任となり、その誌名を「ドイツ刑法　刑法・刑法政策・刑事訴訟（Deutsches Strafrecht Strafrecht・Strafrechtspolitik・Strafprozeß）」と改称し、「新シリーズ（Neue Folge）」として登場した。この雑誌は、「闘争の手段」であるとされてはいるが、コーラーの指導を受けたクレーが編者として加わることで、学問的には、刑法学の発展を反映する内容であった。しかし、プロイセン司法省の高官を編者に加えたことで、ナチス刑法の宣伝雑誌という面もあり、言ってみれば「ドイツ第三帝国」とその運命を同じくしたとも言える。ナチスは、どのようにして「権力の座」に付き得たのであろうか。第一次大戦後、屈辱的なベルサイユ条約の制約下で、経済的・政治的に弱体なワイマール共和国の社会的混乱に乗じ、権力を握ろうとした「国家社会主義ドイツ労働者党（Nationalsozialistische Deutsche Arbeiterpartei）」の党首アドルフ・ヒトラーは、1923年11月8日に、ミュンヘン反乱（Putsch）を企て、失敗し、ミュンヘンの裁判所で有罪判決を受け、ランツベルクの刑務所（Haftanstalt Landsberg）で、城塞拘禁に付された[6]。釈放後、ヒトラーとその一味は、ワイマール憲法の弱点を利用して「議会主義的な方法」による権力の奪取を企てた。そしてついに、1933年1月30日に、選挙で第1党となった「ナチ党」の党首ヒトラーは、ヒンデンブルク大統領から「総理大臣（Reichskanzler）」に任命された。権力を掌握したヒトラーは、大統領の議会解散権と緊急勅令発布権とを悪用し、政治的混乱に乗じて権力を奪取するための下地として、同年3月、後に「権力授権法［全権委任法ともいう］（Ermächtigungsgesetz）」と呼ばれた「民族及び国の危難を克服するための法律（Gesetz zur Behebung der Not von Volk und Reich）」を制定し、議会の権限を制限し、政府が法律を制定する権限を得ることとした。7月14日には、「新政党設立禁止法（Gesetz gegen die Neubildung von Parteien）」により、一党独裁の基礎固めをし、1934年1月には「新国家建設」の名目により、州（Land－邦とも訳す）政府・議会を廃止した。8月2日、ヒンデンブルク大統領の死去に伴い、「国家元首法（Gesetz über das Staatsoberhaupt des Deutschen Reiches）」を制定して、大統領と総理大臣の権限を取得し、後に「総統（Führer）」を名乗った。「雑誌　ドイツ刑法」の誕生前後は、このような政治的・社会的な大変革、まさに「ナチス革命」とも言うべき時代であった。

3　この雑誌の「前身」である「ゴルトダンマー刑法雑誌」の「解題」でも指摘したように[7]、創刊以来、何度となく「誌名」を改め、第47巻（1900年）から「刑法及び刑事訴訟雑誌（Archiv für Strafrecht und Strafprozeß）」となり、ベルリン大学のヨーゼフ・コーラー[8]が編集主任となった。コーラーは第67巻（1919年）

の編集途中で死去し、編者の一人で、ベルリン大学の客員教授であったベルリン高等裁判所部長判事（Senatspräsident am Kammergericht）カール・クレー[9]が編集責任者となり、第77巻（1933年）まで、その任にあった。そして、1934年に「ドイツ刑法」へと引き継がれたのである。

4 「雑誌　ドイツ刑法」に登載された論文の多くは、それが書かれた時代、特に「理想的な民主主義国家」と言われた「ワイマール共和国」を否定して誕生した「全体主義的権力国家」の時代的背景を色濃く残している。それらの著作には，今日の我が国とは無縁の「法思想」「法的所産」が色濃く出ている。戦前、戦時中の我が国における「日本精神」「大東亜共栄圏」「国体」「臣道実践」などの空しい言葉の乱舞する「狂気の文章」に触れたときの悍（おぞ）ましさと同じである。とは言うものの、その中には、1932年以後に研究者の道を歩み始めた人々、「新進気鋭」の学者が登場している（詳しくは、後述）。そして、彼等の多くが、時代的制約にもかかわらず、時流に流されることなく、また地味な研究テーマと取り組んでもいた。どんな時代にも、時流に乗る人もいれば、苦々しく思いながら、積極・消極の抵抗をした人々も少なくなかったのである。逆に、戦争後も「論客」として「生き残り」、活躍した「ナチス刑法学者」もいた。中には、「この人が、当時、ナチス刑法理論にのめり込んだのはなぜだろう」と考えさせられる人も少なくない。我が国とは異なり、ドイツの場合、戦争犯罪に対して「正面から向かい合い」「戦争中の言動」について、きちんとした自己批判が出来ていると言ってよい。戦争中の言動を賛美したり、歴史的事実を歪曲したり、戦前の「民族謀殺行為」を否定するような特定の言動（例えば、“アウシュヴィッツの嘘”）は、「刑法上の罪」として訴追される[10]。政治団体を標榜する暴力団の「怪しげな資金集め」のためとはいえ、街頭宣伝のカーキ色の車が、ボリュームを上げて「我が大君に召されたる云々」といった「二度と聞きたくもない戦時歌謡」を流して回るという、無批判・無反省な行為を「表現の自由」として許している我が国の風景とは事情が異なる。こうした心ない徒輩の横行する状況については、昭和のはじめに生を受け、戦争前後の「狂気の時代」を経験した我々「昭和一桁」の世代の者が、きちんと書き残しておく必要がある。この資料は、「学問の連続性」という見地から、過去の業績をも視野に入れて研究する必要を痛感している編者が、生涯の仕事として、「19世紀の刑法学」から今日までの刑法学の動きとのかかわりを念頭に置きながら、「あるべき姿の刑法学」を模索している作業の一環をなしている。

5　この資料を利用しようとする若い世代の諸君のために、ドイツ刑法学を過去に遡って考える場合に気をつけるべき若干の事項を、思いつくままに列挙しておく。

a　ベルリン市州の高等裁判所は、現在もなお Kammergericht と称する。直訳すれば「帝室裁判所」とでもいおうか。その前身は、プロイセン王国の最高裁判所

であった[11]。1871年に「ドイツ帝国（Das Deutsche Reich）」が誕生し、その最高裁判所（das Reichsgericht）が1877年に、ライプチッヒに創設され、1918年、帝政が崩壊した後もライヒスゲリヒトと呼ばれ[12]、ナチス時代にもその名称は変らなかった（1945年まで）。戦後、西ドイツでは、1949年にカールスルーエに「連邦通常裁判所（der Bundesgerichtshof）」が創設された。ちなみに、旧東独では、1949年の「ドイツ民主共和国憲法」により、その最高裁判所（das Oberste Gericht）がベルリンに創設された。もっとも、旧東独では、制度上、最高裁判所といえども、ドイツ統一社会党（die Sozialistische Einheitspartei Deutschlands-SED-）に従属し、共産党支配下の「司法の僕」にすぎなかった。

b 「ライヒ（Reich）」を「帝国」と呼ぶのは、場合による。その起源は「神聖ローマ帝国」である（das Heilige Römische Reich Deutscher Nation＝Sacrum Imperium Romanorum Nationis Germanicae）に遡る。「ナチスの支配したドイツ」を「第三帝国（das Dritte Reich）」と呼ぶのは、皮肉を込めてのことであり、ナチス政権が樹立されたおりに、ヒトラーが「1000年も続く国民国家」と豪語したのを風刺したことに始まる。実際は、12年しか存続しなかった。「ライヒ」というのは、1871年に「ドイツ帝国（Das Deutsche Reich）」が創建されるまで、大小様々な「独立国家群」に分かれていた状態に終止符を打ち、諸領邦を超えた「統一体としてのドイツ」という意味を有した。ホフマン v. ファラースレーベン（Hoffmann von Fallersleben）の詩であり、ドイツ国歌として歌われている「ドイツの歌（Das Deutschlandlied）」の第１節にある“Deutschland ist über alles”にそれが現われている。戦争中に、意図的に「世界に冠たるドイツ」という訳がつけられたが、それは原文の意味を“曲解し”、ナチスに迎合した訳語であった。

c 「民族裁判所（Volksgerichtshof）」について。この“裁判所”は、今日の言葉でいうと“特別裁判所”（Sondergericht）である。「国民裁判所」という訳語もありうる［本稿の注13に掲げた私の論文でも、それに従っていた］。しかし、当時のドイツでは、ナチ党の機関紙は Völkischer Beobachter といい、「民族主義的」というニュアンスを持っていた。そこで、本稿では、「民族裁判所」という訳語を用いることにした[13]。

d 「保安処分」について。おそらく、この資料の中で、刑事立法史的に見て、最も重要な論文は、Edmund Mezger, Täterstrafrecht. DSt Bd. 1, 1934, S. 125-135; 145-161. であろう。この論文は、標題が予想させる内容ではなく、通称“常習犯罪人法”（Gewohnheitsverbrechergesetz）を解説した論文である[14]。“行為刑法から行為者刑法へ”という問題は、メツガーの論文 Die Straftat als Ganzes. ZStrW Bd. 57, 1938, S. 675-701. と Tatstrafe und Täterstrafe. ZStrW Bd. 60, 1941, S. 353-423; Tattypen, Tätertypen und Charaktertypen im Kriegsstrafre-

cht. Aus einer kriminologischen Arbeitstagung in Graz am 12. Juni 1942. DStR Bd. 9, 1942, S. 108-117. 等で扱われている。

我が国では、不幸なことに、「保安処分の導入」に関して、昭和40年代から50年代にかけて争いがあり、その際、「処分反対論者」が、その反対の論拠として「保安処分はナチス政権が、刑法を改正して導入した」という、まことしやかな“虚言”を弄したことがある。しかし、「保安処分」の起源は、カール・シュトースの起草にかかる「スイス刑法予備草案」に遡る。さらに、ナチスの台頭よりも遙か以前の「ドイツ帝国刑法の改正運動」において取り上げられ、ワイマール共和国時代の「改正刑法草案」の多くにおいて提案されていた。ただ、第一次世界大戦後の政治的に不安定な状況の故に、「刑法の大改正」は実現せず、ナチスの「権力国家」がそれを実現したのである。それは、「保安・改善処分」の合理性・正当性と関係のない出来事である。今から30年前の「法律情報不足の時代」には、こうした“ためにする虚言”でも“無知な人々”を動かす力を持ち得た。だが、今は違う。しかしながら、妙な党派的な議論に毒されると、今日でも、若手の論文にこのような“まことしやかなウソ”が出てくるものである[15]。

e　本誌の12年間に、21人の学者が寄稿している。そのうち、8人は1933年以前に正教授になっていた（Alexander Graf zu Dohna, Wenzel Graf Gleispach, Eduard Kohlrausch, Hellmuth Mayer, Edmund Mezger, Wolfgang Mittermaier, Wilhelm Sauer, Hellmuth v. Weber）。それらの教授達は、19世紀生まれである。ただ、オーストリア出身のヘルマン・レーダー（Hermann Roeder, 1898-1978）は、1933年にウィーン大学私講師になっている。

残りの14人が、新進の教授として、本誌を舞台として活躍を開始したのである。その中で、v. ゲミンゲン（Hans Dieter Freiherr v. Gemmingen）は戦争の悲劇を体現した。1902年に生まれ、ミュンヘン大学で音楽と哲学を学び、1923年に法学部に転じ、ハイデルベルク、ゲッティンゲンでの勉学を経て、ベルリンのコールラウシュの助手、その推薦でグライフスワルトに移り、1931年末、“未遂の違法性”で教授資格を取得し、1938年にハッレ大学の教授となった。やがて、戦争が激しくなり、兵士として召集され、ロシア戦線に投入され、1944年12月、その捕虜収容所で衰弱死を遂げたという[16]。他に、戦後にナチス党員としての責任を問われ、教職に戻れなかったジーゲルト（Karl Siegert-PD Münster 1931 → oP Göttingen 1933）の例がある。この2人を除く12人が、戦後のドイツ刑法学を支える活躍をしたのであった。以下、その氏名をアルファベット順に並べ、私講師（PD）、教授（oP）に就任した年度、若干の記事を書き残す。

Gottfried Boldt（PD Bonn 1935 → oP Breslau 1938. ボルトは、ロシア戦線で捕虜になり、1955年に帰国。エアランゲン大学教授となったが、1957年に急死し

た), Hans Jürgen Bruns（PD Breslau 1938 → aoP Greifswald 1939 → oP Posen 1941), Georg Dahm（PD Heidelberg → oP Kiel 1933 → oP Leipzig 1939 → oP Straßburg), Heinrich Henkel（PD Hamburg 1930 → oP Marburg 1934 → oP Breslau 1935), Richard Lange（PD Berlin 1938 → oP Jena 1940), Reinhart Maurach（PD Breslau 1940 → oP Königsberg 1941), Karl Peters（PD Köln 1931 → Staatsanwalt → oP Greifswald 1942), Friedrich Schaffstein（PD Göttingen 1930 → oP Leipzig 1933 → oP Kiel 1935 → oP Straßburg 1941), Adolf Schönke（PD Berlin 1937 → oP Freiburg 1938), Thomas Würtenberger（PD Freiburg 1939 → oP Erlangen 1940).

6　本資料の成立事情について一言しておく。私は、1957年から59年にかけて、ハイデルベルク大学に留学をした。そのおりに、法学部の旧ゼミナールの図書室で、ドイツ語圏諸国の多くの大学の“講義要綱”に接し、「ドイツ刑法学を担う教授陣」を概観し、資料化を試みた[17]。慶應義塾大学法学部助手の時のことである。その後20年して、「西ドイツ刑法学」という資料集を公刊した[18]。ドイツ刑法学の研究は、私のライフワークの一つである。手元にかなり多くの未整理の資料が放置されているのであるが、今回の「ドイツ刑法」もその一つであった。これは、第１巻（1933年）から第11巻（1944年）までの11冊であり、そのうちの第３、４巻、第６、７、８巻がオリジナルであり、他は復刻版である。この雑誌を見ると、第二次世界大戦のドイツに及ぼした影響を推測できる。それというのは、第１巻－第５巻（1933年-1938年）は毎巻400頁を超え、第２巻（1935年）は496頁の大冊である。ところが、第二次世界大戦が開始された1939年（第６巻）は360頁、1940年、41年は200頁台、42年（第９巻）は192頁、43年は168頁、そして44年は１冊、40頁で終わる。あたかも「第三帝国の終焉」を予告する体の最後であった。

今から３年前に、当時慶應義塾大学法学研究科特別学生の外山美砂子さんが、この雑誌を取り上げ、パソコンを駆使して著者名別の資料化の作業を引き受け、完了してくれた。その後、私が体調を崩して仕事のテンポが乱れ、「編者の解題」を書くのが遅れた。その間、外山さんは、学者及び実務家のうち、これまで私と共同して編著を引き受けてくれた同僚たちの手で公刊された著書や雑誌に発表した資料の関連箇所を書き込む準備をしてくれた。今回やっと、関連記事のメモに使う材料を調え、大体考えていたような内容の解題を書き上げることが出来たので、公刊する次第である。今後は、1953年に復刊された「ゴルトダンマー刑法雑誌」の戦後の分をまとめ、この雑誌を全体として把握出来るよう努力したいと思う。

［宮澤浩一　記］

1)　Theodor Goltdammer については、v. Büllow, Theodor Goltdammer. All-

gemeine Deutsche Bibliographie. Bd. 9, 1897. S. 347.

2) Jürgen Wolter (Hrsg), 140 Jahre Goltdammer's Archiv für Strafrecht. Eine Würdigung zum 70. Geburtstag von Paul-Günter Pötz, 1993, S. Ⅸで編者のウォルターは、ペッツの経歴等を紹介している。なお、GA 2003, S. 8 f. 参照。

3) Jürgen Wolter/Wilfried Küper, Goltdammer's Archiv für Strafrecht nach 150 Jahren. GA 2003, S. 1 ff.

4) 宮澤浩一・小名木明宏・ゴルトダンマー刑法雑誌　著者名目録　(1)-(4)、法学研究　第68巻 3 号- 6 号、1995年。

5) Roland Freisler については、Helmut Ortner, Der Hinrichter. Roland Freisler-Mörder im Dienste Hitlers, 1993 が詳論している。Ralph Angermund, Die geprellten "Richterkönige". Zum Niedergang der Justiz im NS Zeit, in: Hans Mommsen/Susanne Willems (Hrsg.), Herrschaftsalltag im Dritten Reich. Studien und Texte, 1988, S. 304 ff. なお、後出（注13）をも参照。民族裁判所の長官としてのフライスラーは、"法衣を着た死刑執行人" というあだ名がつけられている。興味あることに、ヘルムート・レッヘラーの引用する H. ゼンフトの表現によると「何度ても繰り返し、ナチ時代を思い出し、合法性と犯罪との限界は紙一重であり、最初の要請に応えて限度を超えるのは、極めて義務に忠実で、中産階級の普通の人達であったという事実をはっきり言うことは大変必要である。ローランド・フライスラーもそのような者の一人であったのだ」とのことてある（Helmut Lecheler, Unrecht in Gesetzesform? Gedanken zur "Radbruch'schen Formel", 1994, S. 16, Anm. 46.)。ごく普通の人が権力を握ると、人が変ったようになるのは、"人間の悲しき性" なのたろう。ナチスの親衛隊長官となり、ユタヤ人絶滅計画を実行したハインリッヒ・ヒムラーも、ワイマール共和国末期の就職難の時代には、平凡な "養鶏業者" であったことが知られている。

6) Otto Gritschneider, Bewährungsfrist für den Terroristen Adolf H. Der Hitler Putsch und die bayerische Justiz, 1990.

7) 宮澤・小名木（前出・注 4）第68巻 3 号、1995年、 3 頁以下。

8) Günter Spendel, Josef Kohler. Bild eines Universaljuristen, 1983.

9) Karl Klee については、NN., Klee † DSt Bd. 11, 1944, S. 40 を見よ。なお、宮澤・小名木（前出・注 4)、法学研究第68巻 3 号、1995年、 4 頁以下、 4 号、20頁以下に、ワイマール共和国時代の Archiv für Strafrecht und Strafprozeß. Bd. 67, 1919-Bd. 77, 1933 の編集責任者だったクレーについて紹介している。

10) この問題については、極めて多くの論文が寄せられている（注釈書・体系書の文献欄参照)。特に、最近の単行本を挙げる。Thomas Wandres, Die Strafbarkeit des Auschwitz-Leugnens, 2000.

11) Eberhard Schmidt, Kammergericht und Rechtsstaat. Eine Erinnerungsschrift, 1968. なお、Bernhard Diestlkamp, Reichskammergericht und Rechts-

staatsgedanke. Die Kameraljudikatur gegen die Kabinettsjustiz, 1994 をも参照。

12）「ライヒスゲリヒト（ライヒ裁判所）」に関しては、Ulrich Eisenhardt, Deutsche Rechtsgeschichte, 1984, S. 328 f.; Gerhard Köbler, Deutsche Rechtsgeschichte. Ein systematischer Grundriß. 5. Aufl., 1996, S. 195, 200.; Mitteis/Lieberich, Deutsche Rechtsgeschichte. 18. Aufl., 1988, S. 459. など参照。

13）「民族裁判所」については、Walter Wagner, Der Volksgerichtshof im nationalsozialistischen Staat. Die deutsche Justiz und Der Nationalsozialismus. Bd. III, 1974; Hannsjoachim W. Koch, Volksgerichtshof. Politische Justiz im 3. Reich, 1988; Günter Wieland, Das war der Volksgerichtshof. Ermittlungen Fakten Dokumente, 1989。「民族裁判所」が創設され（1934年）て60年後の1994年は、1944年にヒトラー暗殺計画に加担した者に対する苛酷な判決が言い渡され、処刑がなされて50周年目に当たる。Klaus Marxen, Das Volk und sein Gerichtshof. Eine Studie zum Nationalsozialistischen Volksgerichtshof, 1994 と、Edmund Lauf, Der Volksgerichtshof und sein Beobachter, Bedingungen und Funktionen der Gerichtsberichterstattung im Nationalsozialismus, 1994 は、この裁判所に関する戦後の研究を総括する文献である。なお、Heinz Hillermaier (hrsg.), »Im Namen des Deutschen Volkes«. Todesurteil des Volksgerichtshofes. 2. Aufl., 1982［紹介：宮澤浩一・死刑の大量生産にいたる道〈ナチスと死刑〉、死刑の現在　総合特集シリーズ46、1990年、178頁以下］。ナチス法制については、Martin Hirsh/Diemut Majer/Jürgen Meinck (Hrsg.), Recht, Verwaltung und Justiz im Nationalsozialismus. Ausgewählte Schriften, Gesetze und Gerichtsentscheidungen von 1933 bis 1945, 1984; Diemut Majer, Grundlagen des nationalsozialistischen Rechtssystems. Führerprinzip, Sonderrecht, Einheitspartei, 1989 参照。

14）1933年の「常習犯罪人法」を含むナチス政権初期の刑事立法の注釈は、Reinhard Frank, Das Strafgesetzbuch für das Deutsche Reich. Nachtrag zur 18. Auflage. Die Strafgesetzgebung der Jahre 1931 bis 1935, herausgegeben und erläutert von Ernst Schäfer und Hans v. Dohnanyi, 1936 にある。なお、「常習犯罪人法」については、5年ほど前、Christian Müller, Das Gewohnheitsverbrechergesetz vom 24. November 1933. Kriminalpolitik als Rassenpolitik, 1997. が出ている。

15）この問題については、これ以上書かないことにする。法制度や学問の歴史を扱う場合、色々な見方が出来る。特に、時代的な制約を受けている議論を扱うのは難しい。この意味で、最近読んだ刑法学者の“伝記”における“伝記学・書誌学的作法”は、学ぶべき多くのものを提供する。Holger Karitzky, Eduard Kohlrausch-Kriminalpolitik in vier Systemen. Eine strafrechtshistorische Biographie, 2002. これと比べると、Gerit Thulfaut, Kriminalpolitik und Strafrechtslehre bei Edmund Mezger (1883-1962). Eine wissenschaftsgeschichtliche und biographische Untersuchung, 2000. の批判は、一面的すぎる。

16） Karl Engisch, Hans Dieter Freiherr von Gemmingen, SJZ 1947, Sp. 799 f.

17） 宮澤浩一・ドイツ語圏各国大学における刑事法学関係研究者総覧、法学研究　31 巻 8 号、1958年。

18） 宮澤浩一・西ドイツ刑法学　学者編、1978年。その後、追録 5 回、追完 2 回を出している。

アモン　v. Ammon, Wilhelm (Landgerichtsdirektor, Reichsjustizministerium)

Vgl. Miyazawa/Ida, Zeitschrift für die gesamte Strafrechtswissenschaft, 1986, S. 325.

Das Deutsche Auslieferungsgesetz in der deutschen Rechtsprechung. DStR Bd. 1, 1934, S. 46-53, 100-107.

Die Bedeutung der Strafausschließungsgründe bei der Entscheidung über Auslieferungsersuchen. DStR Bd. 4, 1937, S. 281-297.

ベッカー　Becker, W. (I. Staatsanwalt, Krems(Donau))

Vgl. Miyazawa, Der Gerichtssaal, 1976, S. 10 u. 227; Miyazawa/Onagi, Goltdammers Archiv für Strafrecht-Autorenverzeichnis, Hogaku Kenkyu, Bd. 68, Heft 3, S. 207(1995).

Das Verhältnis der Staatsanwaltschaft zur Kriminalpolizei im neuen Strafverfahren. DStR Bd. 5, 1938, S. 167-174.

Die falsche Anschuldigung unter besonderer Berücksichtigung des österreichischen Rechts. DStR Bd. 10, 1943, S. 33-42.

ベーレンス　Behrens (Amtsrat, Preuß. Justizministerium)

Neugestaltung der Strafregistervorschriften. DStR Bd. 1, 1934, S. 243-248.

ベルゲス　Berges, August (Gerichtsassessor, Köln)

Pflichtwidrigkeit und Willensstrafrecht. DStR Bd. 1, 1934, S. 239-243.

Zum Rechtswidrigkeitsbegriff eines völkischen Strafrechts. DStR Bd. 2, 1935 S. 440-452.

ボルト　Boldt (Prof.)

Vgl. Miyazawa, Die deutsche Strafrechtswissenschaft, 1978, S. 43 f.; Miyazawa/Ida, Zeitschrift für die gesamte Strafrechtswissenschaft, 1986, S. 349.

Zur Tagung der Gesellschaft für deutsches Strafrecht. “§ 2 und die Rechtsprechung”. DStR Bd. 5, 1938, S. 385-387.

ブルンス　Bruns, Hans-Jürgen (Landgerichtsrat, Prof. Greifswald)

Vgl. Miyazawa, Die deutsche Strafrechtswissenschaft, 1978, S. 47 ff.; Zweite Ergänzung, 1981, S. 8.; Dritte Ergänzung, S. 12.; Vierte Ergänzung, S. 12 f.; Miyazawa/Ida, Zeitschrift für die gesamte Strafrechtswissenschaft, 1986, S. 355.

Die “Bestrafung aus dem mildesten Gesetz” bei wahldeutiger Tatfeststellung (§ 2b StGB.). DStR Bd. 3, 1936, S. 277-289.

Zur Frage der Strafbarkeit des “Versuchs” eines untauglichen Subjekts. Änderung der bisherigen Rechtsprechung des Reichsgerichts? DStR Bd. 5, 1938, S. 161-167.

Die Bedeutung des krankhaft oder rauschbedingten Irrtums für die Feststellung “einer mit Strafe bedrohten Handlung” i. S. der §§ 42b, 330a StGB. DStR Bd. 6, 1939, S. 225-250.

ブル　Bull (Landgerichtsrat, Graudenz)

Vgl. Miyazawa/Onagi, Goltdammers Archiv für Strafrecht-Autorenverzeichnis, Hogaku Kenkyu, Bd. 68, Heft 3, S. 200(1995).

Die Strafe des Volksschädlings. DStR Bd. 9, 1942, S. 23-26.

コッヘムス　Cochems (Landgerichtsrat, Bonn)

Zur Zeugenvereidigung im Strafprozeß. DStR Bd. 9, 1942, S. 51-53.

ダーム　Dahm (Prof. Kiel)

Vgl. Miyazawa, Die deutsche Strafrechtswissenschaft, 1978, S. 64 ff.; Miyazawa/Ida, Zeitschrift für die gesamte Strafrechtswissenschaft, 1986, S. 376 f.

Das Ermessen des Richters im nationalsozialistischen Strafrecht. DStR Bd. 1, 1934, S. 87-96.

Die Schwangerschaftsunterbrechung auf Grund eugenischer Indikation. DStR Bd. 1, 1934, S. 209-217.

Strafrichter und Gesetz im neuen Staat. (Bemerkungen zu der Schrift von Henkel über Strafrichter und Gesetz im neuen Staat, Hanseatische Verlagsanstalt 1934.) DStR Bd. 1, 1934, S. 248-253.

Der Staatsanwalt im neuen Strafverfahren. DStR Bd. 2, 1935, S. 257-267.

ダニンガー　Daninger (Rechtsanwalt, Jägerndorf)

Ist der Privatkläger von der Einvernahme als Zeuge ausgeschlossen? DStR Bd. 8, 1941, S. 95-97.

デルフラー　Doerffler, Fritz (Ministerialrat, Reichsjustizministerium)

Die Rechtsmittel im künftigen Strafverfahren! DStR Bd. 2, 1935, S. 275-283.

グラーフ　ツー　ドーナ Graf zu Dohna (Prof. Bonn)

Vgl. Miyazawa, Der Gerichtssaal, 1976, S. 32 u. 238 f.; Miyazawa/Ida, Zeitschrift für die gesamte Strafrechtswissenschaft, 1986, S. 376 f.

Die Anfechtbarkeit rechtskräftiger Strafurteile. DStR Bd. 3, 1936, S. 16-24.

Die Wiederaufnahme zuungunsten. DStR Bd. 4, 1937, S. 201-203.

Zur Lehre von den Kommissivdelikten durch Unterlassung. DStR Bd. 6, 1939, S. 142-147.

Die Problematik der Aufgaben des Revisionsgerichts in Theorie und Praxis. DStR Bd. 7, 1940, S. 65-75.

Das Reichsgericht zur Teilnahmelehre. DStR Bd. 7, 1940, S. 120-122.

Unrecht und Beleidigung. DStR Bd. 8, 1941, S. 34-41.

Betrachtungen über das fortgesetzte Verbrechen. DStR Bd. 9, 1942, S. 19-22.

エーベルト　Ebert (Staatsanwaltschaftsrat, Reichsjustizministerium)

Gefahr für die Rechtspflege. Ein Beitrag zur Frage der Bestrafung der uneidlichen falschen Aussage. DStR Bd. 3, 1936, S. 125-138.

アイヒラー　Eichler, Hans (Landgerichtsdirektor, Reichsjustizministerium)

Vgl. Miyazawa, Der Gerichtssaal, 1976, S. 37; Miyazawa/Ida, Zeitschrift für die gesamte Strafrechtswissenschaft, 1986, S. 386.

Inwieweit ist in der Strafvollstreckung Raum für eine Mitwirkung richterlicher Instanzen? DStR Bd. 2, 1935, S. 357-364.

エレメンス　Elemens, W. (Rechtsanwalt, Hamburg)

Ist die eidesstattliche Versicherung des Beschuldigten im Strafverfahren als Mittel der Glaubhaftmachung zulässig? DStR Bd. 6, 1939, S. 197-203.

エンゲルハルト　Engelhardt (Amtsgerichtsrat, Hannover)

Die Gestaltung der Hauptverhandlung in Jugendsachen. DStR Bd. 9, 1942, S. 117-123.

エッピンガー　Eppinger, Heinrich (Rechtsanwalt)

Mikrophon im Strafprozeß. DStR Bd. 4, 1937, S. 355-361.

フィンケ　Finke, H. (Oberamtmann, Zwickau i. Sa.)

Vgl. Miyazawa, Der Gerichtssaal, 1976, S. 44 f.

Die ersten 50 Entmannungen gefährlicher Sittlichkeitsverbrecher im Oberlandesgerichtsbezirk Dresden. Ein Beitrag zur Kastrationsforschung. DStR Bd. 2, 1935, S. 186-197.

Ein Vorschlag zur Persönlichkeitsuntersuchung des "gefährlichen Gewohnheitsverbrechers". DStR Bd. 3, 1936, S. 250-256.

フランク　Frank, Hans (Generalgouverneur Reichsminister)

Die Vorträge der Münchener Tagung 1940. Die Aufgabe der Strafrechtserneuerung. DStR Bd. 7, 1940, S. 179-181.

フライスラー　Freisler, Roland (Präsident des Volksgerichtshofs)

Vgl. Miyazawa/Ida, Zeitschrift für die gesamte Strafrechtswissenschaft, 1986, S. 405.

Deutsches Strafrecht, Vermächtnis und Aufgabe. DStR Bd. 1, 1934, S. 1-9.

Zum 27. März, dem Jahrestag der Ernennung des Preußischen Justizministers. DStR Bd. 1, 1934, S. 81-87.

Schutz des Volkes oder des Rechtsbrechers? Fesselung des Verbrechens oder des Richters? Einiges über das zweckmäßige Maß der Bindung des Richters an gesetzliche Straftatbestände. DStR Bd. 2, 1935, S. 1-32.

Einige Gedanken über Willensstrafrecht und Mehrheit von Straftaten. DStR Bd. 2, 1935, S. 162-186.

Zum 11. Internationalen Kongreß für Strafrecht und Gefängniswesen. Einführung und Widmung. DStR Bd. 2, 1935, S. 225-227.

Grundzüge des kommenden Strafverfahrensrechts. DStR Bd. 2, 1935, S. 228-247.

Gedanken zum Schutz der Bewegung im neuen Strafrecht. DStR Bd. 3, 1936, S. 65-91.

Der Treuegedanke im neuen Strafrecht. DStR Bd. 3, 1936, S. 193-209.

Dringende Fragen der deutschen Strafgerichtsorganisation und des deutschen Strafverfahrens. DStR Bd. 3, 1936, S. 305-342.

Ein Jahr Blutschutzrechtsprechung in Deutschland. Erfahrungen und Lehren. DStR Bd. 3, 1936, S. 385-397.

Zur Stellung des Verteidigers im neuen Strafverfahren. DStR Bd. 4, 1937, S. 113-125.

Ermittlungshilfe. DStR Bd. 4, 1937, S. 313-323.

Das Weisungsrecht des Oberreichsanwaltes. DStR Bd. 6, 1939, S. 81-89.

Gedanken zum rechten Strafmaß. DStR Bd. 6, 1939, S. 329-342.

Die Vorträge der Münchener Tagung 1940. Die Aufgabe der Strafrechtserneuerung. DStR Bd. 7, 1940, S. 181-182.

Mut zu lebenswahrem Strafrecht. Behandelt an Hand eines Beispiels verständlicher Tötung. DStR Bd. 8, 1941, S. 65-71.

Nach geltendem Recht unmöglich? Eine Entgegnung. DStR Bd. 8, 1941, S. 77-85.

Die unbestimmte Verurteilung Jugendlicher als Persönlichkeitsfrage. DStR Bd. 8, 1941, S. 173-181.

Kriminologie - unentbehrliche und gleichwertige Grundlage erfolgreicher Strafrechtspflege. DStR Bd. 9, 1942, S. 97-107.

Kleine Beiträge zu einer starken nationalsozialistischen Rechtspflege. DStR Bd. 9, 1942, S. 129.

"Anklagevorschriften und gerichtliche Entscheidungen sind in bündiger Kürze unter Beschränkung auf das unbedingt Notwendige abzufassen. " DStR Bd. 9, 1942, S. 129-138.

フリートリヒス　Friedrichs, Karl (Justizrat, Ilmenau)

Vgl. Miyazawa/Ida, Zeitschrift für die gesamte Strafrechtswissenschaft, 1986, S. 408; Miyazawa/Onagi, Goltdammers Archiv für Strafrecht-Autorenverzeichnis, Hogaku Kenkyu, Bd. 68, Heft 3, S. 186(1995).

Reichspolizeistrafgesetzbuch. DStR Bd. 2, 1935, S. 75-84.

ゲルベルト　Gelbert, Karl (I. Staatsanwalt, OLG München)

Der politische Gestaltwandel des Strafrechts. DStR Bd. 4, 1937, S. 19-35, 91-106.

Die entsprechende Anwendung des Gesetzes im Strafverfahrensrecht. DStR Bd. 5, 1938, S. 15-23.

Die Rechtskraft im Gebiet der mitbestraften Tat ("straflosen Vor- und Nachtat"). DStR Bd. 6, 1939, S. 342-350.

Feuerbach. DStR Bd. 8, 1941, S. 137-146.

Vollendung und Beendigung von Straftaten. DStR Bd. 10, 1943, S. 1-10.

ゲミンゲン　Frhr. v. Gemmingen, Hans Dieter (Prof. Halle)

Vgl. Miyazawa/Ida, Zeitschrift für die gesamte Strafrechtswissenschaft, 1986, S. 414 f.

Die Erfassung der Rechtswidrigkeit im System eines Willensstrafrechts. DStR Bd. 2, 1935, S. 105-116.

Über Grundgedanke und Tragweite des Autofallengesetzes. DStR Bd. 6, 1939, S. 1-23.

ギッセル　Gissel, Oskar (Assessor im Verwaltungsrat des Reichsbauernführers)

Die Ordnungsstrafe im Reichsnährstand. DStR Bd. 4, 1937, S. 148-156.

グライスナー　Gleisner, R. (Gerichtsassessor, Reinbek bei Hamburg)

Wie ist zu verfahren, wenn sich der Angeklagte in einem Beleidigungsprozeß mit der unbewiesenen Behauptung verteidigt, er sei von dem Beleidigten zuerst beleidigt worden? I. DStR Bd. 7, 1940, S. 150-151.

グライスパッハ　Graf von Gleispach (Prof.)

Vgl. Miyazawa, Personen- und Sachregister der österreichischen Zeitschrift für das Strafrecht, Hogaku Kenkyu, Bd. 41, Heft 7, S. 49(1968); ders., Schweizerische Zeitschrift für Strafrecht, 1981, S. 84 f.; Miyazawa/Ida, Zeitschrift für die gesamte Strafrechtswissenschaft, 1986, S. 419 f.

Die Vorträge der Münchener Tagung 1940. Entwicklungsrichtungen im Kriegsstrafrecht. DStR Bd. 8, 1941, S. 1-6.

グロスターマン　Glostermann, L. (Amtsgerichtsrat, Jugendrichter, Bonn)

Zur Tagung der Gesellschaft für deutsches Strafrecht. Strafe und Erziehung der Jugendlichen mit besonderer Berücksichtigung der bisherigen Erfahrungen. DStR Bd. 5, 1938, S. 389-390.

ゴルツ　Graf von der Goltz（Rechtsanwalt, Berlin）

Die Stellung des Verteidigers im Künftigen Strafprozeß. DSt Bd. 2, 1935, S. 267-275.

Beleidigungsfähigkeit von Personengemeinschaften. DStR Bd. 3, 1936, S. 209-211.

グレール　Graehl（Staatsanwalt, Augsburg）

Richterliche Rechtschöpfung und Gesetz im Lichte altgriechischer Rechtsphilosophie. DStR Bd. 7, 1940, S. 49-56.

グランディ　Grandi, Dino（der italienische Justizminister）

Die faschistische Reform des Strafrechts und Strafvollzugsrechts. DStR Bd. 7, 1940, S. 174-179.

グラウ　Grau, F.（Ministerialrat, Reichsjustizministerium）

Rechtsauslegung oder Rechtsänderung. DStR Bd. 1, 1934, S. 25-29

Einige Fragen aus dem Entschädigungsgesetz vom 14. 7. 1904. DStR Bd. 1, 1934, S. 217-223.

Der Gedanke des staatlichen Obereigentums im Strafrecht. DStR Bd. 1, 1934, S. 305-309.

Ein Vorschlag zur strafrechtlichen Neuregelung des Zweikampfes. DStR Bd. 2, 1935, S. 217-223.

Die Auswirkungen nationalsozialistischen Rechtsdenkens auf die strafrechtliche Nebengesetzgebung. DStR Bd. 3, 1936, S. 211-227.

Gedanken über das künftige militärische Strafverfahren. DStR Bd. 4, 1937, S. 177-197.

グリーフェバッハ　Grifebach（Senatspräsident a. D., Hamburg）

Der Versicherungsbetrug im kommenden deutschen Strafrecht. DStR Bd. 2, 1935 S. 204-206.

Schriftliche Ungebühr. DStR Bd. 7, 1940, S. 85-86.

グストルフ　Gustorf (Landgerichtsdirektor, M. Gladbach)
Kriminologische Ausbildung. DStR Bd. 10, 1943, S. 51-61.

ハーク　Haag, Ferdinand (I. Staatsanwalt, Köln)
Vgl. Miyazawa, Der Gerichtssaal, 1976, S. 66.
Beweisfragen des geltenden und künftigen Strafprozesses. DStR Bd. 5, 1938, S. 409-423.

ハース　Haas (Oberstaatsanwalt, Karlsruhe)
Zur Frage der Zulässigkeit der Einziehung und Ersatzeinziehung nach dem Tode des Täters, insbesondere im Devisenstrafrecht. DStR Bd. 8, 1941, S. 122-131.

ヘディケ　Haedicke, Johannes (Oberstabsarzt a. D., Schreiberhau)
Über Willensfreiheit und Bestrafung. Biologische Bemerkungen zu der Einheit der Persönlichkeit und der Einheit der Kausalität. DStR Bd. 5, 1938, S. 350-358.

ハーゲマン　Hagemann (Generalstaatsanwalt, Düsseldorf)
Der Richter und die Verordnung über die Durchführung der Untersuchungshaft vom 1. Augst 1933 (VDU.). DStR Bd. 9, 1942, S. 46-50.

ハルトマン　Hartmann, Rob. (Amtsgerichtsrat, Prag)
Zur Konkurrenz zwischen reichsdeutschen und Protektoratsstrafgesetzen. DStR Bd. 11, 1944, S. 31-36.

ハルトゥング　Hartung, F. (Reichsgerichtsrat)
Vgl. Miyazawa/Ida, Zeitschrift für die gesamte Strafrechtswissenschaft, 1986, S. 440 f.
Änderung des Privatklageverfahrens? DStR Bd. 9, 1942, S. 43-46.

ハウプトフォーゲル　Hauptvogel, Fritz (Ministerialrat, Reichsjustizministerium)
Vgl. Miyazawa, Der Gerichtssaal, 1976, S. 71; Miyazawa/Ida, Zeitschrift für

die gesamte Strafrechtswissenschaft, 1986, S. 443.

Welche Zielrichtung ist dem künftigen Strafvollzug zu setzen? DStR Bd. 2, 1935, S. 321-334.

ハイトリッヒ　Heidrich (Staatsanwalt, Wien)

Vgl. Miyazawa, Ein Ausschnitt aus dem gegenwärtigen Stand der österreichischen Strafrechtswissenschaft-Zeitschriftenaufsätze der Strafrechtslehrer und Praktiker in Österreich, Hogaku Kenkyu, Bd. 41, Heft 12, S. 54(1968); Die Österrichische Strafrechtswissenschaft. Erste Ergänzung, Hogaku Kenkyu, Bd. 52, Heft 4. 5, S. 95(1979).

Zur tätigen Reue. DStR Bd. 8, 1941, S. 186-189.

ヘルヴィヒ　Hellwig, Albert (Landgerichtsdirektor, Potsdam)

Vgl. Miyazawa, Der Gerichtssaal, 1976, S. 73 f. u. 252 f.; ders., Schweizerische Zeitschrift für Strafrecht, 1981, S. 114 f.; Miyazawa/Onagi, Goltdammers Archiv für Strafrecht-Autorenverzeichnis, Hogaku Kenkyu, Bd. 68, Heft 4, S. 169(1995).

Die Reform der Strafzumessung. DStR Bd. 3, 1936, S. 418-423.

ヘンケル　Henkel, Heinrich (Prof. Marburg)

Vgl. Miyazawa, Die deutsche Strafrechtswissenschaft, 1978, S. 175 ff.; Zweite Ergänzung, 1981, S. 16.; Dritte Ergänzung, 1983, S. 21.; Miyazawa/Ida, Zeitschrift für die gesamte Strafrechtswissenschaft, 1986, S. 450.

Der Parteigedanke im Strafverfahren. DStR Bd. 2, 1935, S. 129-145.

Die Huptverhandlung im Kommenden Strafverfahren. DStR Bd. 2, 1935, S. 401-431.

ヒンツェ　Hintze (Rechtsanwalt u. Notar, Magdeburg)

Ist das Privatklageverfahren abänderungsbedürftig? DStR Bd. 8, 1941, S. 163-167.

フーバーナーゲル　Hubernagel, G. (Rechtsanwalt, Wuppertal-Elberfeld)

Vgl. Miyazawa, Der Gerichtssaal, 1976, S. 84.

Eine Allgemeine Deutsche Strafordnung. DStR Bd. 1, 1934, S. 224-236.

Das Alternativ-Strafurteil als Doppelwirkung. DStR Bd. 1, 1934, S. 329-333.

カイザー　Kayser, Alfred (Gerichtsassessor, Berlin)

Zur Strafbarkeit der Sodomie nach § 175b StGB. DStR Bd. 4, 1937, S. 46-48.

クレー　Klee, K. (Senatspräsident, Prof. Berlin)

Vgl. Miyazawa/Ida, Zeitschrift für die gesamte Strafrechtswissenschaft, 1986, S. 489 f.; Miyazawa/Onagi, Goltdammers Archiv für Strafrecht-Autorenverzeichnis, Hogaku Kenkyu, Bd. 68, Heft 4, S. 157(1995).

Die gefährliche Handlung als Grundform des Verbrechens. DStR Bd. 1, 1934, S. 113-125.

Nochmals Verletzungs- oder Gefährdungsstrafrecht? DStR Bd. 1, 1934, S. 190-195.

Die Grenze zwischen Versuch (Unternehmen) und Vorbereitung. Ein gesetzgeberisches Problem. DStR Bd. 1, 1934, S. 283-292.

Eineinhalb Jahre Gewohnheitsverbrechergesetz. DStR Bd. 2, 1935, S. 373-389.

Das Verbrchen als Rechtsguts- und als Pflichtverletzung. Ein kritischer Beitrag zur Geschichte des Verbrechensbegriffs. DStR Bd. 3, 1936, S. 1-16.

Rassenschande und Rechtsirrtum. DStR Bd. 4, 1937, S. 14-18.

Vom englischen Strafverfahren. Ein Beitrag zur Erneuerung des deutschen Strafverfahrens. DStR Bd. 4, 1937, S. 35-46.

Religion und Strafrecht. Eine grundsätzliche Untersuchung; zugleich eine Kritik der einschlägigen Rechtsprechung des Reichsgerichts. DStR Bd. 5, 1938, S. 145-160.

Soll der Gotteslästerungs-Paragraph fallen? DStR Bd. 5, 1938, S. 378-380.

Sachverständigengutachten als Wiederaufnahmegrund. DStR Bd. 5, 1938, S. 423-424.

Das neue Schweizerische StGB. und das Strafrecht des Dritten Reichs. DStR Bd. 6, 1939, S. 126-141.

Der Tätertypus als Mittel der Auslegung und der Gestaltung strafbarer Tatbestände. DStR Bd. 7, 1940, S. 97-108.

Ist die Lieferung unwirksamer Abtreibungsmittel Betrug? II. DStR Bd. 8, 1941, S. 46-48.

Das Volksempfinden als Rechtfertigungsgrund an sich strafbaren Verhaltens (Umkehrschluß aus § 2 StGB.). DStR Bd. 8, 1941, S. 71-76.

I. Wann ist eine im Wiederaufnahmeantrag beigebrachte Tatsache "neu"? II. Kann die Revision wirksam auf die Anordnung der Sicherungsverwahrung in Verbindung mit dem Strafausspruch beschränkt werden? DStR Bd. 8, 1941, S. 146-151.

Die Krise der Sühnetheorie. DStR Bd. 9, 1942, S. 68-76.

Was läßt das Reichsgericht vom "Tätertypus" übrig? DStR Bd. 10, 1943, S. 11-18.

Die Zurechnungsfähigkeit als Strafempfänglichkeit. DStR Bd. 10, 1943, S. 65-80.

Nötigung und Erpressung. DStR Bd. 10, 1943, S. 125-136.

Zum künftigen Rechtsmittelsystem in Strafsachen. DStR Bd. 11, 1944, S. 21-30.

ケーベル　Koebel (Amtsgerichtsrat, Stuttgart)

Vgl. Miyazawa/Ida, Zeitschrift für die gesamte Strafrechtswissenschaft, 1986, S. 493.

Das Verfahren zur Feststellung der Unrichtigkeit ehrverletzender Behauptungen. I. DStR Bd. 4, 1937, S. 323-330

Rufwiederherstellung durch den Richter. DStR Bd. 8, 1941, S. 181-185.

ケーラー　Köhler (Prof. Erlangen)

Vgl. Miyazawa, Der Gerichtssaal, 1976, S. 99 f. u. 264 f.; Miyazawa/Onagi, Goltdammers Archiv für Strafrecht-Autorenverzeichnis, Hogaku Kenkyu, Bd. 68, Heft 4, S. 154(1995).

Die Unterlassung der Verbrechensanzeige und die Wehrmittelbeschädigung in ihrer neuen Fassung. DStR Bd. 3, 1936, S. 397-412.

コールラウシュ　Kohlrausch (Prof. Berlin)

Vgl. Miyazawa, Die deutsche Strafrechtswissenschaft, 1978, S. 286 ff.; ders., Schweizerische Zeitschrift für Strafrecht, 1981, S. 144 f.; Miyazawa/Ida, Zeitschrift für die gesamte Strafrechtswissenschaft, 1986, S. 494 ff.

Hehler und Nutznießer. Ein Beitrag zur Analogiefrage und zur Frage der Ersatzhehlerei. DStR Bd. 6, 1939, S. 113-125.

クラナー　Kraner (Oberstaatsanwalt, Prenzlau)

Die Strafbarkeit von Gesetzesumgehungen durch Verlegung des Tatortes in das Ausland. DStR Bd. 5, 1938, S. 175-177.

Unverrückbarkeit des Grundgedankens im Sinne des § 2 StGB. ? Eine Betrachtung an Hand der Frage der sogenannten Ersatzhehlerei. DStR Bd. 6, 1939, S. 266-269.

クルーク　Krug, Karl (Oberstaatsanwalt, Reichsjustizministerium)

"Das Deutsche Strafrecht" als strafrechtswissenschaftliches Ergänzungsblatt der "Deutschen Justiz" DStR Bd. 2, 1935, S. 161.

キュンマーライン　Kümmerlein (Landgerichtsrat, Reichsjustizministerium)

Fragen des "Interterritorialen" Strafrechts und Strafverfahrensrechts nach der Wiedervereinigung Österreichs mit dem Deutschen Reich. DStR Bd. 5, 1938, S. 280-301.

クンツェ　Kunze, O. (Rechtsanwalt, Halle)

Zur Auslegung von § 1 Ziffer 1 des Gesetzes zur Gewährleistung des Rechtsfriedens. DStR Bd. 6, 1939, S. 158-163.

ラングベーン　Langbehn, Karl (Rechtsanwalt, Berlin)

Der Begriff der Amts- und Dienstpflichtverletzung bei der Bestechung unter Berücksichtigung der Rechtsprechung des Reichsgerichts. DStR Bd. 5, 1938, S. 221-224.

ランゲ　Lange (Prof. Jena)

Vgl. Miyazawa, Die deutsche Strafrechtswissenschaft, 1978, S. 332 ff.; Zweite Ergänzung, 1981, S. 28.; Dritte Ergänzung, 1983, S. 34.; Vierte Ergänzung, 1985, S. 36.; ders., Schweizerische Zeitschrift für Strafrecht, 1981, S. 155 f.; Miyazawa/Ida, Zeitschrift für die gesamte Strafrechtswissenschaft, 1986, S. 512 f., 1190.

Die grundsätzliche Bedeutung der neuen Bestimmungen über den Geltungsbereich des Strafrechts. I. DStR Bd. 8, 1941, S. 6-18.

レーマン　Lehmann, Rudolf (Ministerialrat, Reichsjustizministerium)

Vgl. Miyazawa/Ida, Zeitschrift für die gesamte Strafrechtswissenschaft,

1986, S. 516.

Die Friedensrichter- und Schiedsmannsordnung. DStR Bd. 2, 1935, S. 298-311.

レオンハルト Leonhardt, C. (Landgerichtsdirektor i. R., Leipzig)

Vgl. Miyazawa, Schweizerische Zeitschrift für Strafrecht, 1981, S. 160.; Miyazawa/Ida, Zeitschrift für die gesamte Strafrechtswissenschaft, 1986, S. 518.

Die Gefühlskomplexe "Schuld" und "Lüge". Ihre Bedeutung und methodische Auswertung für die Beweisführung im Falle bestrittener Täterschaft. DStR Bd. 8, 1941, S. 48-57.

ローヴェ Lowe (Amtsgerichtsrat, Gerolzhofen)

Schriftliche Ungebühr (Zum Aufsatz des H. Senatspräs. a. D. Dr. Grisebach in Heft 5-6/1940). DStR Bd. 8, 1941, S. 25.

マイヤー Maier (Amtsgerichtsrat, Stuttgart)

Das Ende der Sühnetheorie. DStR Bd. 10, 1943, S. 153-160.

マンテル Mantel (Dozent u. Regierungsforstrat)

Ist die Feststellung des Wert- und Schadensersatzes im Forstrügeverfahren durch die VO. v. 3. 9. 1936 aufgehoben? DStR Bd. 4, 1937, S. 156-158.

マルクス Marx, Rudolf (Ministerialdirigent, Reichsjustizministerium)

Die Gefangenenarbeit unter besonderer Berücksichtigung der Urbarmachung von Ödländereien. DStR Bd. 2, 1935, S. 364-373.

マッティル Mattil (Oberlandesgerichtsrat, Zweibrücken)

Vgl. Miyazawa/Ida, Zeitschrift für die gesamte Strafrechtswissenschaft, 1986, S. 540; Miyazawa/Onagi, Goltdammers Archiv für Strafrecht-Autorenverzeichnis, Hogaku Kenkyu, Bd. 68, Heft 4, S. 141(1995).

Nachtragsklage. DStR Bd. 9, 1942, S. 161-172.

マウラッハ Maurach, Reinhart (Prof. Königsberg(Pr.))

Vgl. Miyazawa, Die deutsche Strafrechtswissenschaft, 1978, S. 379 ff.;

Miyazawa/Ida, Zeitschrift für die gesamte Strafrechtswissenschaft, 1986, S. 540.

Handlungspflicht und Pflichtverletzung im Strafrecht. DStR Bd. 3, 1936, S. 113-125.

Treupflicht und Schutzgedanke im internationalen Strafrecht. DStR Bd. 5, 1938, S. 1-15.

Der Bankrott der bolschewistischen Strafrechtsdoktrin. DStR Bd. 5, 1938, S. 359-369.

Beihife zum Meineid durch Unterlassung. DStR Bd. 11, 1944, S. 1-20.

マイヤー　Mayer, Hellmuth (Prof. Rostock)

Vgl. Miyazawa, Der Gerichtssaal, 1976, S. 118 f. u. 274.; ders., Die deutsche Strafrechtswissenschaft, 1978, S. 385 ff.; Zweite Ergänzung, 1981, S. 31.; Miyazawa/Ida, Zeitschrift für die gesamte Strafrechtswissenschaft, 1986, S. 541.

Der Verbrechensbegriff. Ein Forschungsbericht. DStR Bd. 5, 1938, S. 73-107.

メースケ　Meeske (Landgerichtsrat, Reichsjustizministerium)

Die Rechtsnatur der Ordnungsstrafe im Wirtschaftsrecht. DStR Bd. 3, 1936, S. 152-166.

Zur Erneuerung des Steuerstrafrechts. DStR Bd. 5, 1938, S. 257-279.

マイスナー　Meissner (Oberstaatsanwalt, Köln)

Die Todesstrafe in der Kriegsgesetzgebung. DStR Bd. 10, 1943, S. 84-87.

マイスター　Meister, Hans-Georg (Dr. Hamburg)

Spezialität und Konsumtion. DStR Bd. 10, 1943, S. 26-28.

Strafbefreiender Rücktritt durch Erfolgsabwendung beim untauglichen Versuch. DStR Bd. 10, 1943, S. 160-162.

Das Verhältnis der Tötungsdelikte zu den Körperverletzungstatbeständen. DStR Bd. 11, 1944, S. 37-40.

メツガー　Mezger, Edmund (Prof. München)

Vgl. Miyazawa, Der Gerichtssaal, 1976, S. 124 f. u. 277 f.; ders., Die deutsche Strafrechtswissenschaft, 1978, S. 397 ff.; ders., Schweizerische Zeitschrift für

Strafrecht, 1981, S. 186 ff.; Miyazawa/Ida, Zeitschrift für die gesamte Strafrechtswissenschaft, 1986, S. 548 f.

Täterstrafrecht. DStR Bd. 1, 1934, S. 125-135, 145-161.

Die grundsätzliche Bedeutung der neuen Bestimmungen über den Geltungsbereich des Strafrechts. II. DStR Bd. 8, 1941, S. 18-24.

Tattypen, Tätertypen und Charaktertypen im Kriegsstrafrecht. Aus einer kriminologischen Arbeitstagung in Graz am 12. Juni 1942. DStR Bd. 9, 1942, S. 108-117.

Die Teilnahmelehre in der Strafrechtsangleichungsverordnung vom 29. Mai 1943. DStR Bd. 10, 1943, S. 116-125.

ミッターマイヤー　Mittermaier, W. (Prof. Heidelberg)

Vgl. Miyazawa, Personen- und Sachregister der österreichischen Zeitschrift für das Strafrecht, Hogaku Kenkyu, Bd. 41, Heft 7, S. 54(1968); ders., Die deutsche Strafrechtswissenschaft, 1978, S. 409 ff.; ders., Schweizerische Zeitschrift für Strafrecht, 1981, S. 188 ff.; Miyazawa/Ida, Zeitschrift für die gesamte Strafrechtswissenschaft, 1986, S. 552 f.; Miyazawa/Onagi, Goltdammers Archiv für Strafrecht-Autorenverzeichnis, Hogaku Kenkyu, Bd. 68, Heft 4, S. 134(1995).

Zur Frage der Körperschaftsverbrechen. DStR Bd. 6, 1939, S. 320-322.

ミュラー　Müller (Landgerichtsrat, Hannover)

Die Besetzung der neuen Schöffenkammer. DStR Bd. 5, 1938, S. 425-427.

ミュラーアイゼルト　Müllereisert, F. A. (Privatdozent, Berlin)

Vgl. Miyazawa, Der Gerichtssaal, 1976, S. 131.

Der Beginn der Straftat. DStR Bd. 3, 1936, S. 40-43.

ミュラー＝ヘンネベルク　Müller-Henneberg, Hans Martin (Assessor, Berlin)

Echte und unechte Rückwirkung im Berufsstrafrecht. DStR Bd. 5, 1938, S. 224-228.

ノイペルト　Neupert, Herbert (Assessor, Berlin)

Das Delikt der Tierquälerei nach § 9 Absatz 1 des Reichs-Tierschutsgesetzes. DStR Bd. 4, 1937, S. 385-398.

Die Übertretungsdelikte des Reichs-Tierschutzgesetzes. DStR Bd. 5, 1938, S. 209-220, 301-310.

ニーダーロイター　Niederreuther (Amtsgerichtsrat, Windsheim)

Vgl. Miyazawa, Der Gerichtssaal, 1976, S. 136 u. 280.

Ideal- und Realkonkurrenz im künftigen Strafrecht. DStR Bd. 1, 1934, S. 318-329.

Die Beteiligung des Verletzten am künftigen Strafverfahren. DStR Bd. 2, 1935, S. 311-321.

Prozeßgegenstand und Strafprozeßreform. DStR Bd. 3, 1936, S. 166-175.

Prozessuale Fragen um § 330a StGB. DStR Bd. 3, 1936, S. 241-250.

Der Privatkläger als Zeuge? DStR Bd. 8, 1941, S. 160-163.

ニートハンマー　Niethammer (Reichsgerichtsrat a. D., Leipzig)

Vgl. Miyazawa/Ida, Zeitschrift für die gesamte Strafrechtswissenschaft, 1986, S. 562.

Das Reichsgericht als Schrittmacher der Entwicklung des Strafverfahrens nach geltendem Recht und in Zukunft. DStR Bd. 4, 1937, S. 125-138.

Über das Wesen des Meineids und die rechtliche Möglichkeit eines fahrlässigen Falscheids. DStR Bd. 7, 1940, S. 161-173.

ニッペ　Nippe (Prof. Königsberg (Pr.))

Alkoholdelikte und § 51 Abs. 2 StGB. DStR Bd. 6, 1939, S. 284-285.

ノヴェリ　Novelli, Giovanni (Sektionspräsident am Kassationshof, Leiter der italienischen Strafvollzugsverwaltung)/Übersetzt von Dozent Schönke, Berlin

Vgl. Miyazawa/Ida, Zeitschrift für die gesamte Strafrechtswissenschaft, 1986, S. 564.

Die ersten Erfahrungen mit den sichernden Maßnahmen verwaltungsmäßiger Art in Italien. DStR Bd. 4, 1937, S. 217-233.

オッター　Otter (Landgerichtsrat, Berlin)

Ist die devisenrechtliche Einziehung (und Ersatzeinziehung) in den Nachlaß des verstorbenen Beschuldigten zulässig? DStR Bd. 6, 1939, S. 270-276.

ペスタロッツァ　Graf von Pestalozza, Baldur

Rechtsgutsverletzung oder Pflichtverletzung? DStR Bd. 5, 1938, S. 107-111.

Die Rechtmäßigkeit der Amtsausübung im Sinne des § 113 StGB. DStR Bd. 6, 1939, S. 34-37.

ペータース Peters, Karl (Staatsanwalt, Prof. Köln)

Vgl. Miyazawa, Die deutsche Strafrechtswissenschaft, 1978, S. 447 ff.; Zweite Ergänzung, 1981, S. 34 f.; Dritte Ergänzung, 1983, S. 40 f.; Vierte Ergänzung, 1985, S. 48.; ders., Schweizerische Zeitschrift für Strafrecht, 1981, S. 211 f.; Miyazawa/Ida, Zeitschrift für die gesamte Strafrechtswissenschaft, 1986, S. 574 f.

Verwarnung mit Strafvorbehalt. Zur Arbeit der amtlichen Strafrechtskommission. DStR Bd. 1, 1934, S. 310-317.

Die falsche Aussage und ihre Bekämpfung. DStR Bd. 2, 1935, S. 145-153.

Das gesunde Volksempfinden. (Ein Beitrag zur Rechtsquellenlehre des 19. und 20. Jahrhunderts.) DStR Bd. 5, 1938, S. 337-350.

ラム　Ramm, Harry (Fakultätsassistent, Königsberg (Pr.))

Vgl. Miyazawa, Der Gerichtssaal, 1976, S. 53.; Miyazawa/Ida, Zeitschrift für die gesamte Strafrechtswissenschaft, 1986, S. 585.

Durchbrechung der materiellen Rechtskraft im Strafprozeß? DStR Bd. 6, 1939, S. 37-45.

ラウフ　Rauch, Herbert (Dr. Kiel)

Vgl. Miyazawa/Ida, Zeitschrift für die gesamte Strafrechtswissenschaft, 1986, S. 587.

Zur Frage der mittelbaren Falschbeurkundung bei gerichtlichen Protokollen und Urteilen. DStR Bd. 6, 1939, S. 297-307.

レッシュ　Resch, Alfred (Ministerialrat, Oberstaatsanwalt, München)

Der Stufenstrafvollzug. Rückblick und Ausblick. DStR Bd. 2, 1935, S. 334-356.

リーチュ　Rietzsch (Reichsgerichtsrat, Reichsjustizministerium)

Prozeßbetrug und Wahrheitspflicht. DStR Bd. 1, 1934, S. 9-20.

Die Neuordnung des Rechts der Übertretungen. DStR Bd. 2, 1935, S. 65-75.

Die vorgetäuschte Straftat und die falsche Aussage. DStR Bd. 10, 1943, S. 97-115.

レーベル　Roebel (Amtsrichter, Stuttgart)

Die falsche Aussage im Strafverfahren. DStR Bd. 3, 1936, S. 256-260.

レーダー　Roeder, Hermann (Dozent, Wien)

Vgl. Miyazawa, Ein Ausschnitt aus dem gegenwärtigen Stand der österreichischen Strafrechtswissenschaft-Zeitschriftenaufsätze der Strafrechtslehrer und Praktiker in Österreich, Hogaku Kenkyu, Bd. 41, Heft 12, S. 56(1968); Die Österreichische Strafrechtswissenschaft. Erste Ergänzung, Hogaku Kenkyu, Bd. 52, Heft 4. 5, S. 125 f.(1979); Miyazawa/Ida, Zeitschrift für die gesamte Strafrechtswissenschaft, 1986, S. 591.

Zur Lehre vom "Negativen Betrug". DStR Bd. 7, 1940, S. 7-22.

Zum Standortproblem der unechten Unterlassungsdelikte. DStR Bd. 8, 1941, S. 105-114, 152-160.

ローリング　Rohling, Walter (Landgerichtsrat, Nürnberg)

Die strafrechtliche Bekämpfung der Grenzwilderei. DStR Bd. 6, 1939, S. 154-158.

ザウアー　Sauer, Wilhelm (Prof. Münster)

Vgl. Miyazawa, Der Gerichtssaal, 1976, S. 164 u. 288 ff.; ders., Die deutsche Strafrechtswissenschaft, 1978, S. 515 ff.; Miyazawa/Ida, Zeitschrift für die gesamte Strafrechtswissenschaft, 1986, S. 602 f.; Miyazawa/Onagi, Goltdammers Archiv für Strafrecht-Autorenverzeichnis, Hogaku Kenkyu, Bd. 68, Heft 5, S. 180(1995).

Der kriminalistische Dienst vor neuen Aufgaben. Zugleich zur Organisation strafrechtlicher Forschung. DStR Bd. 1, 1934, S. 20-25.

Die Ethisierung des Strafrechts. Über die Prinzipien der Strafrechtsneuerung und ihre praktische Auswirkung. DStR Bd. 1, 1934, S. 177-190.

Das Verhältnis von Kriminologie und Strafrecht. Ein Nachwort zu dem Kongreß für Kriminologie in Rom 1938. DStR Bd. 6, 1939, S. 276-283.

Die Bedeutung der Strafvollzugsordnung v. 22. 7. 1940 für das Strafurteil

und die Strafverfolgung. Zugleich zur Lehre vom Tätertyp. DStR Bd. 7, 1940, S. 136-141.

シェーファー Schäfer, Ernst (Ministerialdirektor, Reichsjustizministerium)

Die Auflockerung des Verfahrens im künftigen Strafprozeß und der Gedanke der materiellen Gerechtigkeit. DStR Bd. 2, 1935, S. 247-257.

Das Verfahren zur Feststellung der Unrichtigkeit ehrverletzender Behauptungen. II. Einige Bemerkungen zu demselben Thema. DStR Bd. 4, 1937, S. 330- 335.

Der VII. Internationale Kongreß zur Vereinheitlichung des Strafrechts in Kairo. DStR Bd. 5, 1938, S. 112-118.

Die Vorträge der Münchener Tagung 1940. Das interlokale Strafrecht. II. DStR Bd. 7, 1940, S. 192-197.

シェーファー Schäfer, K. (Oberlandesgerichtsrat, Reichsjustizministerium)

Vgl. Miyazawa/Ida, Zeitschrift für die gesamte Strafrechtswissenschaft, 1986, S. 605.; Miyazawa/Onagi, Goltdammers Archiv für Strafrecht-Autorenverzeichnis, Hogaku Kenkyu, Bd. 68, Heft 5, S. 180 f.(1995).

Bemerkungen zur ärztlichen Schweigepflicht. DStR Bd. 4, 1937, S. 197-200.

シャフシュタイン Schaffstein, Friedrich (Prof. Straßburg)

Vgl. Miyazawa, Der Gerichtssaal, 1976, S. 165 u. 290 f.; ders., Die deutsche Strafrechtswissenschaft, 1978, S. 526 ff.; Zweite Ergänzung, 1981, S. 38 f.; Dritte Ergänzung, 1983, S. 44.; Vierte Ergänzung, 1985, S. 55.; Miyazawa/Ida, Zeitschrift für die gesamte Strafrechtswissenschaft, 1986, S. 605 f.

Ehrenstrafe und Freiheitsstrafe in ihrer Bedeutung für das neue Strafrecht. DStR Bd. 1, 1934, S. 273-282.

Bemerkungen zur gesetzlichen Regelung der Strafbemessung im kommenden deutschen Strafrecht. DStR Bd. 1, 1934, S. 369-376.

Das Verbrechen eine Rechtsgutsverletzung? DStR Bd. 2, 1935, S. 97-105.

Revision und Berufung im künftigen Strafverfahren. DStR Bd. 2, 1935, S. 465-483.

Zur Neugestaltung des Jugendstrafrechtes. DStR Bd. 4, 1937, S. 73-91.

Der Streit um das Rechtsgutsverletzungsdogma. DStR Bd. 4, 1937, S. 335-348.

Zur Tagung der Gesellschaft für deutsches Strafrecht. Die strafrechtliche Behandlung der Jugendlichen. DStR Bd. 5, 1938, S. 387-389.

Zur Lehre vom Tätertyp im Kriegsstrafrecht. DStR Bd. 9, 1942, S. 33-43.

シェフラー　Scheffler, Friedrich (Landgerichtsrat u. Dozent, Verwaltungsakademie Dresden)

Vgl. Miyazawa, Der Gerichtssaal, 1976, S. 165.

Prozeßgesinnung und Prozeßbetrug. DStR Bd. 6, 1939, S. 204-210.

シンネラー　Schinnerer, Erich (Prof. Prag)

Vgl. Miyazawa/Ida, Zeitschrift für die gesamte Strafrechtswissenschaft, 1986, S. 609.

Zur Entwicklung des Verbrechensbegriffes im englischen Recht. DStR Bd. 3, 1936, S. 139-152.

Die Entwicklung des strafrechtlichen Schutzes der Arbeitskraft. DStR Bd. 4, 1937, S. 1-14.

Die neue rumänische Strafprozeßordnung. Die Prozeßordnung Carols II. DStR Bd. 5, 1938, S. 46-51.

Das österreichische Strafgesetzbuch und die nationalsozialistische Strafrechtsreform. DStR Bd. 5, 1938, S. 118-130.

Zur Strafrechtsanwendung. DStR Bd. 8, 1941, S. 114-121.

シュロスキー　Schlosky (Senatspräsident a. D., Breslau)

Vgl. Miyazawa/Ida, Zeitschrift für die gesamte Strafrechtswissenschaft, 1986, S. 610.

Die Untreue. DStR Bd. 5, 1938, S. 177-188, 228-236.

Begehung einer Straftat durch Unterlassung. DStR Bd. 7, 1940, S. 129-136.

Ist die Lieferung unwirksamer Abtreibungsmittel Betrug? I. DStR Bd. 8, 1941, S. 41-46.

Zum Ehrenschutz von Personengesamtheiten. DStR Bd. 8, 1941, S. 85-95.

Die Einwilligung des Verletzten in Begehung einer Straftat. DStR Bd. 10, 1943, S. 19-26.

Vom Mörder und Totschläger. DStR Bd. 10, 1943, S. 142-153.

シュリューター　Schlüter, Franz (Amtsgerichtsrat, Reichsjustizministerium)

Vgl. Miyazawa, Der Gerichtssaal, 1976, S. 168; Miyazawa/Ida, Zeitschrift für die gesamte Strafrechtswissenschaft, 1986, S. 611.

Der Ehrenschutz des Angeklagten im Strafurteil. DStR Bd. 3, 1936, S. 43-50.

Die Gewaltanwendung, insbesondere der Schutzwaffengebrauch, bei der vorläufigen Festnahme nach § 127 der Reichsstrafprozeßordnung. DStR Bd. 7, 1940, S. 1-7.

シュミット　Schmid, Fr. (Kriminalrat, Polizeipräsidium Stuttgart)

Das strafbare Unterlassen in heutiger Rechtsgeltung. DStR Bd. 3, 1936, S. 424-427.

シュミット　Schmidt, Wilhelm (Oberfeldarzt, Berlin)

"Gedanken zum rechten Strafmaß". Psychiatrische Bemerkungen zu dem Artikel von Dr. jur. Roland Freisler. (Deutsches Strafrecht, Heft 11/12 November-Dezember 1939) DStR Bd. 9, 1942, S. 138-143.

シュミット＝ライヒナー　Schmidt-Leichner, Erich (Landgerichtsrat, Berlin)

Wann soll in Zukunft beim Versuch Strafmilderung zulässig sein? Gedanken zum Willens- und Erfolgsstrafrecht. DStR Bd. 3, 1936, S. 412-417.

Angeklagter, Staatsanwalt und Verteidiger im künftigen Strafprozeß. DStR Bd. 4, 1937, S. 247-255.

Zur Problematik des Rauschmittelmißbrauchs - nach § 330 StGB. -. DStR Bd. 7. 1940, S. 109-120.

Zur Strafermäßigung nach § 157 Abs. 2 Z2. StGB. DStR Bd. 8, 1941, S. 191-192.

Der Durchbruch der materiellen Gerechtigkeit im Strafrecht. (Eine Entwicklungsskizze). DStR Bd. 9, 1942, S. 2-18.

Schreckschutzpistole und § 1 der Gewaltverbrecherverordnung. II. DStR Bd. 9, 1942, S. 83-86.

Zweifelsfragen zum Diebstahl und Meineid. DStR Bd. 10, 1943, S. 88-93.

シュナイダー＝ノイエンブルク　Schneider-Neuenburg (Generalstaatsanwalt i. R., Düsseldorf)

Vgl. Miyazawa/Onagi, Goltdammers Archiv für Strafrecht-Autorenverzeichnis, Hogaku Kenkyu, Bd. 68, Heft 5, S. 177(1995).

Der Strafprozeß in der Rechtsprechung des Reichsgerichts. Die Entscheidungen des Reichsgerichts auf dem Gebiete des Strafverfahrens Bd. 66 und Bd. 67 Heft 1, 2 und 3 der amtlichen Sammlung der Entscheidungen des Reichsgerichts in Strafsachen. DStR Bd. 1, 1934, S. 34-46. /Die Entscheidungen des Reichsgerichts auf dem Gebiete des Strafverfahrens Bd. 67 Heft 4, 5, 6 u. 7 der amtlichen Sammlung der Entscheidungen des Reichsgerichts in Strafsachen. DStR Bd. 1, 1934, S. 161-169. /Die Entscheidungen des Reichsgerichts auf dem Gebiete des Strafverfahrens, Bd. 68 Heft 1, 2 u. 3 der amtlichen Sammlung der Entscheidungen des Reichsgerichts in Strafsachen. DStR Bd. 1, 1934, S. 334-339. /Die Entscheidungen des Reichsgerichtes auf dem Gebiete des Strafverfahrens, Bd. 68 Heft 4, 5, 6 u. 7 der amtlichen Sammlung der Entscheidungen des Reichsgerichtes in Strafsachen. Als Folge des Aufsatzes "Deutsches Strafrecht" 1934, S. 334 fg.. DStR Bd. 2, 1935, S. 198-204. /Die Entscheidungen des Reichsgerichtes auf dem Gebiete des Strafverfahrens, Bd. 69 der amtlichen Sammlung der Entscheidungen des Reichsgerichtes in Strafsachen. Als Folge des Aufsatzes "Deutsches Strafrecht" 1935, S. 198 fg.. DStR Bd. 3, 1936, S. 260-270. /Die Entscheidungen des Reichsgerichtes auf dem Gebiete des Strafverfahrens, Bd. 70 Heft 1, 2 und 3 der amtlichen Sammlung der Entscheidungen des Reichsgerichtes in Strafsachen. DStR Bd. 3, 1936, S. 355-365. /Die Entscheidungen des Reichsgerichtes auf dem Gebiete des Strafverfahrens, Bd. 70 Heft 4, 5, 6 u. 7 der amtlichen Sammlung der Entscheidungen des Reichsgerichts in Strafsachen. Als Folge des Aufsatzes "Deutsches Strafrecht" 1936, S. 355 fg.. DStR Bd. 4, 1937, S. 233-247. /Die Entscheidungen des Reichsgerichtes auf dem Gebiete des Strafverfahrens, Bd. 71 Heft 1, 2, 3 und 4 der amtlichen Sammlung der Entscheidungen des Reichsgerichts in Strafsachen. Als Folge des Aufsatzes "Deutsches Strafrecht" 1937 S. 233 fg.. DStR Bd. 5, 1938, S. 23-39. /Die Entscheidungen des Reichsgerichts auf dem Gebiete des Strafverfahrens, Bd. 71 Heft 5, 6, 7, Bd. 72 Heft 1, 7 u. 3 der amtlichen Sammlung der Entscheidungen des Reichsgerichts in Strafsachen. Als Folge des Aufsatzes "Deutsches Strafrecht" 1938 S. 23 fg.. DStR Bd. 5, 1938, S. 311-320. /Die Entscheidungen des Reichsgerichtes auf dem Gebiete des Strafverfahrens, Bd. 71 Heft 5, 6, 7, Bd. 72 Heft 1, 7 u. 3 der amtlichen Sammlung der Entscheidungen des Reichsgerichtes in Strafsachen. Als Folge des Aufsatzes "Deutsches Strafrecht" 1938 S. 311 fg.. DStR Bd. 5, 1938, S. 370-378. /Die Entscheidungen des Reichsgerichts auf dem Gebiete des Strafver-

fahrens, Bd. 72 Heft 4, 5, 6, 7, u. Bd. 73 Heft 1 u. 2 der amtlichen Sammlung der Entscheidungen des Reichsgerichts in Strafsachen. Als Folge des Aufsatzes "Deutsches Strafrecht" 1938 S. 370 fg.. DStR Bd. 6, 1939, S. 307-320. /Die Entscheidungen des Reichsgerichts auf dem Gebiete des Strafverfahrens, Bd. 73 Heft 3, 4, 5, 6, 7, u. Bd. 74 Heft 1 u. 2 der amtlichen Sammlung der Entscheidungen des Reichsgerichts in Strafsachen. Als Folge des Aufsatzes "Deutsches Strafrecht" 1939 S. 307. DStR Bd. 7, 1940, S. 142-150. /Die Entscheidungen des Reichsgerichts auf dem Gebiete des Strafverfahrens, Bd. 74 Heft 3, 4, 5, 6, 7, und Bd. 75 Heft 1 und 2 der amtlichen Sammlung der Entscheidungen des Reichsgerichts in Strafsachen. Als Folge des Aufsatzes "Deutsches Strafrecht" 1940 S. 142. DStR Bd. 9, 1942, S. 86-93.

ショメルス　Schomerus (Land- und Amtsrichter, Berlin)

Gedanken zum Wehrstrafrecht. DStR Bd. 3, 1936, S. 270-276.

シェンケ　Schönke, Adolf (Prof. Freiburg i. Br.)

Vgl. Miyazawa, Die deutsche Strafrechtswissenschaft, 1978, S. 567 ff.; ders., Schweizerische Zeitschrift für Strafrecht, 1981, S. 246 ff.; Miyazawa/Ida, Zeitschrift für die gesamte Strafrechtswissenschaft, 1986, S. 619 f.

Bemerkungen über einen Adhäsionsprozeß im künftigen Strafverfahren. DStR Bd. 2, 1935, S. 483-490.

Der strafrechtliche Schutz des Staates im neueren ausländischen Recht. DStR Bd. 4, 1937, S. 138-148.

Die Arbeiten der strafrechtlichen Abteilung des II. Internationalen Rechtsvergleichenden Kongreßes. DStR Bd. 4, 1937, S. 297-300.

Ausländisches Strafrecht. Übersicht über die wichtigsten Quellen des materiellen Strafrechts, des Strafprozeßrechts, des strafrechtlichen Staatsschutzrechts, des Jugendstrafrechts, des Strafvollzugsrechts, des Militärstrafrechts sowie über das wichtigste Schrifttum. DStR Bd. 4, 1937, S. 398-432.

Einiges aus ausländischen strafrechtlichen Zeitschriften. DStR Bd. 5, 1938, S. 382-385.

Die englische Strafrechtsreform. DStR Bd. 6, 1939, S. 147-154.

Ausländisches Strafrecht. Übersicht über die wichtigsten Quellen des materiellen Strafrechts, des Strafprozeßrechts, des strafrechtlichen Staatsschutzrechts, des Jugendstrafrechts, des Strafvollzugsrechts, des Militärstrafrechts

sowie über das wichtigste Schrifttum. DStR Bd. 9, 1942, S. 143-158, 172-186.

Die Umgestaltung der Urkundendelikte. DStR Bd. 10, 1943, S. 137-142.

シュレーダー　Schröder (Amtsgerichtsrat, Offenbach a. M.)

Änderung des Privatklageverfahrens? DStR Bd. 9, 1942, S. 26-29.

シュルツェ　Schultze, Ernst (Prof. Göttingen)

Vgl. Miyazawa, Der Gerichtssaal, 1976, S. 173 f. u. 293 f.; Miyazawa/Ida, Zeitschrift für die gesamte Strafrechtswissenschaft, 1986, S. 624.

Gedanken eines Psychiaters zu dem Gesetz gegen gefährliche Gewohnheitsverbrecher und über Maßregeln der Sicherung und Besserung und zu dem Bericht über die Arbeit der amtlichen Strafrechtskommission. DStR Bd. 2, 1935, S. 33-42.

シュヴァルツ　Schwarz (Reichsgerichtsrat, Leipzig)

Vgl. Miyazawa, Der Gerichtssaal, 1976, S. 175 u. 295.

Beweiskraft der Sitzungsniederschrift. DStR Bd. 1, 1934, S. 96-100.

Berufung oder Revision? DStR Bd. 3, 1936, S. 24-40.

Tateinheit und Tatmehrheit im künftigen Strafrecht und Strafprozeß. DStR Bd. 3, 1936, S. 342-355.

Einheitsstrafe und Teilrechtskraft. DStR Bd. 4, 1937, S. 348-355.

ザイデル　Seidel (Amtsgerichtsrat, Berlin)

Vgl. Miyazawa/Ida, Zeitschrift für die gesamte Strafrechtswissenschaft, 1986, S. 627.

Über die Notwendigkeit einer Strafverfahrensliste als Hilfsmittel der Strafrechtspflege. Zugleich ein Beitrag zur Reform des Vorstrafenrechts. DStR Bd. 6, 1939, S. 23-33.

ジーゲルト　Siegert, Karl (Prof. Göttingen)

Vgl. Miyazawa, Der Gerichtssaal, 1976, S. 182 u. 296 f.; ders., Die deutsche Strafrechtswissenschaft, 1978, S. 614 ff.; Zweite Ergänzung, 1981, S. 47.; Miyazawa/Ida, Zeitschrift für die gesamte Strafrechtswissenschaft, 1986, S. 631 f.; Miyazawa/Onagi, Goltdammers Archiv für Strafrecht-Autorenverzeichnis, Hogaku Kenkyu, Bd. 68, Heft 5, S. 173(1995).

Nulla poena sine lege. Kritische Bemerkungen zu den Vorschlägen der amtlichen Strafrechtskommission. DStR Bd. 1, 1934, S. 376-386.

Die Rechtskraftwirkungen im künftigen Strafprozeß. DStR Bd. 2, 1935, S. 283-298.

ゾンマー Sommer (Oberlandesgerichtsrat, Berlin)

Vgl. Miyazawa, Der Gerichtssaal, 1976, S. 183 f. u. 297.; Miyazawa/Onagi, Goltdammers Archiv für Strafrecht-Autorenverzeichnis, Hogaku Kenkyu, Bd. 68, Heft 5, S. 172(1995).

Das neue Tierschutzgesetz. DStR Bd. 1, 1934, S. 29-34.

Wie ist zu verfahren, wenn sich der Angeklagte in einem Beleidigungsprozeß mit der unbewiesenen Behauptung verteidigt, er sei von dem Beleidigten zuerst beleidigt worden? II. DStR Bd. 7, 1940, S. 151-152.

Schreckschußpistole und § 1 der Gewaltverbrecherverordnung. I. DStR Bd. 9, 1942, S. 76-83.

シュタットラー Stadler, Ruth (Gerichtsreferendarin, Frankfurt a. M.)

Zur Strafermäßigung nach § 157 Abs. 1. Z. 2. StGB. I. DStR Bd. 8, 1941, S. 190-191.

シュトゥッツァー Stutzer (Senatspräsident a. D., Kiel)

Vgl. Miyazawa/Ida, Zeitschrift für die gesamte Strafrechtswissenschaft, 1986, S. 648.

Ist eine in einem Strafverfahren von dem damaligen Beschuldigten wissentlich falsch abgegebene Versicherung an Eides Statt straflos? DStR Bd. 6, 1939, S. 193-197.

Die "mit Strafe bedrohte Handlung" i. S. d. § 330a StGB. (Zu dem Urteil des 1. Strafsenats des Reichsgerichts vom 25. 11. 1938 (RGSt. 73, 11 ff.), gleichzeitig zu der Anmerkung dazu von SenPräs. Prof. Dr. Klee in J. W. 1939 S. 547 ff und zu dem Aufsatz von Prof. Dr. Dahm in ZAkDR. 1939 S. 267 ff. DStR Bd. 6, 1939, S. 250-257.

テーヴェ Töwe (Landgerichtsdirektor a. D., Bremen)

Vgl. Miyazawa, Der Gerichtssaal, 1976, S. 197 f. u. 301.

Die Friedensbürgschaft. DStR Bd. 6, 1939, S. 257-266.

トレンクマン　Tränkmann (Landgerichtsrat, Chemnitz)

Über die Bildung von Gesamtstrafen von im Altreich und in der Ostmark begangenen Straftaten. DStR Bd. 7, 1940, S. 22-24.

Der mittelbare Vermögenstransfer in der Rechtsprechung des Reichsgerichts. DStR Bd. 7, 1940, S. 86-90.

トロンマー　Trommer, Harry (Landgerichtsrat, Berlin)

Vgl. Miyazawa, Der Gerichtssaal, 1976, S. 199.; Miyazawa/Ida, Zeitschrift für die gesamte Strafrechtswissenschaft, 1986, S. 656.

Friedensrichter als Zeugen im Strafverfahren. DStR Bd. 5, 1938, S. 381.

Feierliche Eröffnung und feierlicher Schutz der Schwurgerichtstagung. DStR Bd. 6, 1939, S. 163-165.

Beschädigung einer Luftschutzeinrichtung. DStR Bd. 7, 1940, S. 122-125.

ウーレ　Ule (Landgerichtsrat, Kiel)

Unzüchtige Handlungen von Ärzten. Ein Beitrag zur Strafrechtsreform. DStR Bd. 5, 1938, S. 40-46.

ヴェーバー　Weber, Alfr. (Generalstaatsanwalt, Dresden)

Vgl. Miyazawa, Der Gerichtssaal, 1976, S. 208 u. 308.; Miyazawa/Ida, Zeitschrift für die gesamte Strafrechtswissenschaft, 1986, S. 670.; Miyazawa/Onagi, Goltdammers Archiv für Strafrecht-Autorenverzeichnis, Hogaku Kenkyu, Bd. 68, Heft 5, S. 161(1995).

Steht dem Anzeigeerstatter der Weg des § 172 StPO. offen, wenn es sich um ein Privatklagedelikt handelt? DStR Bd. 1, 1934, S. 236-238.

ヴェーバー　v. Weber, Hellmuth (Prof. Bonn)

Vgl. Miyazawa, Der Gerichtssaal, 1976, S. 208 f. u. 308 f.; ders., Die deutsche Strafrechtswissenschaft, 1978, S. 664 ff.; Miyazawa/Ida, Zeitschrift für die gesamte Strafrechtswissenschaft, 1986, S. 670 f.

Die praktischen Auswirkungen der Aufnahme des Unrechtsbewußtsein in den Vorsatzbegriff. DStR Bd. 3, 1936, S. 91-100.

Überleitungsvorschriften im Strafverfahrensrecht. DStR Bd. 7, 1940, S. 33-48, 75-85.

Die Vorträge der Münchener Tagung 1940. Das interlokale Strafrecht. I. DStR Bd. 7, 1940, S. 182-192.

ヴァイゲルト　Weigelt, Werner (Dr., Freiberg i. Sa.)

Vgl. Miyazawa, Der Gerichtssaal, 1976, S. 210.

Die strafrechtliche Verantwortlichkeit für schlechte Wegebeschaffenheit. DStR Bd. 1, 1934, S. 195-198.

Beginn und Ende der verschärften Strafbarkeit des Kraftfahrers nach §§ 222 Abs. 2, 230 Abs. 2 StGB. DStR Bd. 1, 1934, S. 339-342.

ヴュルテンベルガー　Würtenberger, TH. (Prof. Erlangen)

Vgl. Miyazawa, Der Gerichtssaal, 1976, S. 214 u. 311 f.; ders., Die deutsche Strafrechtswissenschaft, 1978, S. 699 ff.; Zweite Ergänzung, 1981, S. 56.; Vierte Ergänzung, 1985, S. 70 ff.; ders., Schweizerische Zeitschrift für Strafrecht, 1981, S. 304 f.; Miyazawa/Ida, Zeitschrift für die gesamte Strafrechtswissenschaft, 1986, S. 683 f.

Aus der Geschichte der unbestimmten Verurteilung. DStR Bd. 10, 1943, S. 81-83.

ツァーヴァー　Zawar (Landgerichtsrat, z. Z. Prag)

Volksschädlingstat oder Volksschädlingstyp? DStR Bd. 10, 1943, S. 42-51.

ツァイラー　Zeiler, A. (Reichsgerichtsrat a. D.)

Vgl. Miyazawa/Ida, Zeitschrift für die gesamte Strafrechtswissenschaft, 1986, S. 686; Miyazawa/Onagi, Goltdammers Archiv für Strafrecht-Autorenverzeichnis, Hogaku Kenkyu, Bd. 68, Heft 5, S. 158(1995).

Zum § 2b StGB. DStR Bd. 9, 1942, S. 65-68.

N. N. (著者不詳)

Karl Klee 65 Jahre als. DStR Bd. 8, 1941, S. 33.

Karl Klee †. DStR Bd. 11, 1944, S. 40.